KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

アメリカ映画を観よう：人権関連場面の案内（その２）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2020-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 広一 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/7927

アメリカ映画を観よう
―人権関連場面の案内（その２）―

短期大学部准教授　岡田　広一

１．はじめに　アメリカ映画に記録された人権問題

アメリカ合衆国の歴史は、自由と平等、そして民主主義を守るための戦いの歴史であり、アメリカ映画には自由・平等・民主主義の重要性と、それらを実現するための先人たちの苦労と努力が繰り返し描かれてきた。そしてまた、アメリカ映画には人種・民族・性別などの差別、貧富の差、信教・表現・恋愛の自由などに関するさまざまな人権問題も描かれている。アメリカ人の日常生活を描いた多くの映画やテレビ番組に、物語を構成している小さなエピソードとしてさまざまな人権問題が描かれていることに気付く。

ここでは、アメリカ合衆国を舞台にした映画５作品とテレビ番組１作品を取り上げ、それらのストーリーを簡単に解説し、その作品に記録された差別などの問題とその時代背景を指摘する。そして、登場人物のせりふや感情表現、音楽や小道具などによって描かれた人権問題を考察することにより、これらの作品に記録され、未だ解決の難しい差別などアメリカ合衆国のかかえるさまざまな人権問題について考えたい。

キーワード：差別、偏見、LGBT、Hispanic、不法入国、障害、虐待

２．１．*The Times of Harvey Milk*『ハーヴェイ・ミルク』（1984年）[1]と*Milk*『ミルク』（2008年）で語られる“Come out”と“Hope”

この２作品は、gay同性愛者であることをアメリカで初めて公表して政治家となったHarvey Bernard Milk（1930年５月22日-1978年11月27日）の人生と、gayに対する差別・偏見を失くすための活動を描いた映画である。

*The Times of Harvey Milk*は伝記ドキュメンタリー映画である。Milkが街の一地域の市民活動家からSan Franciscoを代表する政治家に選出される

までと、元同僚のDan Whiteによる暗殺とその後を記録している。その内容に基づいて、実際の記録映像などを利用したドラマ*Milk*が制作された。

1978年11月27日San Franciscoの市庁舎内で、George Moscone市長（1929年11月24日－1978年11月27日）とcity supervisor市政委員のHarvey Milkが暗殺された。犯人はMilkと同じ市政委員だったDan Whiteで、数日前に委員を辞任したが、市長に復職を願い出ていた。ミルクの在職は1978年１月９日からのわずか11ヵ月だった。

２.２　映画***Milk***は、1978年11月18日金曜日、Harvey Milkがテープレコーダーに遺言を録音する場面から始まる。彼は「自分が暗殺されたときに公開してほしい」[(2)]と言ってこれまでの活動を語る。その日からわずか９日後に彼は暗殺されている。[(3)]

New Yorkの保険会社のビジネスマンであったHarvey Milkが、40歳の誕生日を迎えて「生き方を変えたい」と望み、1972年San Franciscoへ移り住む。彼はパートナーのJoseph Scott SmithとCastro Streetに写真店Castro Cameraを開く。しかし、開店早々近所の酒店の店主が「歓迎しない」挨拶に訪れ「この町には人の法律と神の戒律がある」と言った。

新しい人生の場として選んだSan Franciscoで、Milkは自分と同じようなgayの人たちだけでなく、少数民族・様々な障害をもつ人々・老人などのminorityが住みよい街になるよう意見を言うようになる。小企業の労働組合の人々とも連帯して、他の都市ではcity councilと呼ばれる、San Franciscoのcity supervisor市政委員の選挙に立候補する。1973年から1976年までの選挙では落選するが、毎回支持者を増やしていった。

1976年１月にSan Francisco市長になったGeorge Mosconeは、1977年、市政委員選挙をそれまでの全市を選挙区とした大選挙区制から、District Election地区別選挙にして、各地区で市政委員を選ぶようにした。Milkは、地元Castro Streetを含むDistrict 5「第５地区」の有権者からの支持を得て当選した。この時の選挙で選ばれた市政委員には、Milkの他に、初の女権擁護者Carol Ruth Silverシルバー、初の中国系アメリカ人Gordon Lauラウ、初

の黒人女性Ella Hill Hutchハッチが含まれていた。District Election地区別選挙に変わったことにより、それぞれのコミュニティや立場を代表する委員が選ばれたのであった。

Milkは少数民族・障害のある人々・老人など様々な社会的弱者の権利を擁護する活動をしている。しかし、一番の功績はgayの人権を守ることであった。特に「自分がgayだと公表した人々が、既に得ていた職を奪われるのを防ぐ」ためにGay Rights Bill「Gayの権利を守る法案」を提出し、Moscone市長が署名して法律が施行された。10人の市政委員は賛成したが、ただひとりDan Whiteだけは反対した。元消防士で保守的なWhiteは、女装をするgayについて、否定的・差別的な意味合いの強い語“transvestite”（服装倒錯者）を使って「教師の資格さえあれば学校側は拒否できない」ことが問題だとテレビのインタヴューに答えている。

1978年６月25日、MilkはGay Freedom Day[(4)]のパレードで、殺人を予告する脅迫状を受け取りながらも市庁舎前のステージに上がって演説する。そのスピーチでは、現在一般に「同性愛者であることを公表する」意味として知られている“come out”が繰り返されている。同性愛者であることを知られないようにして暮らしていることは「クローゼットの中にいる」こと、そこから出て来て公表するようMilkは呼びかけている。

演説は、いつもの自己紹介“My name is Harvey Milk, and I want to recruit you. I want to recruit you for the fight to preserve your democracy.”「私はハーヴェイ・ミルク。皆さんを勧誘したい。あなた方の民主主義を守る戦いに勧誘したい」で始まる。

“Brothers and sisters, you must come out. Come out to your parents… Come out to your friends… Come out to your neighbors, to your fellow worker. … I would like to see every gay lawyer, every gay architect come out.”

「兄弟・姉妹のみなさん、“come out”しなければいけません。両親や友人たちに、隣人や職場の仲間に“come out”しましょう。Gayの弁護士や、gayの建築家が“come out”するのに出会いたい」とMilkは言う。特に、弁

護士・建築家・医師・教師など、これまではgayであることを知られて仕事を失うことを恐れていた社会的地位の高い人々に“come out”をしてもらいたかった。そしてstraight異性愛の人々には、彼らの大切な家族や友人たちがgayであることを知って理解してもらいたかったのである。

Milkが人々に呼び掛けた言葉の中でもう一つ大切なのは“Hope”である。彼は様々な場所の演説で“Hope”「希望を持ちましょう」と言った。ここではMilkが録音した遺言の最後の言葉を引用する。

“Hope for better world”“Hope for better tomorrow”

「希望を持ってより良い世界を」「希望を持ってより良い明日を」

“Not only gays, but the Blacks, the Asians, the disabled, the seniors, the us's. Without hope, the us's give up”

「gayだけではなく、黒人、アジア人、障害のある人々、老人、そして私たちみんな。希望がなければ、私たちみんな人生をあきらめてしまう」

“I know you cannot live on hope alone, but without it, life is not worth living.”「希望だけでは生きてゆけないことは分かっています。しかし、希望がなければ、人生は生きる価値がないのです」

“So, you, and you, and you. You gotta give em hope… you gotta give em hope.”「だから、あなたが、あなたが、そしてあなたも。皆さんが彼らに希望を与えてください」とMilkは遺言を“hope”「希望」で結んでいる。

３．*X-Men: Days of Future Past*（『X-Men フューチャー＆パスト』2014年）で語られる“Come out”と“Hope”

*X-Men*は、突然変異により普通の人類にはない特殊な能力を身に着けた新しい人類、mutantミュータントたちが活躍するアメリカンコミックを映画化したものである。そのシリーズ第５作目では、2023年の未来、ミュータントたちと彼らに協力して暮らす人類を攻撃するSentinel（見張り番）と名付けられたロボット軍団が登場する。

ミュータントたちのリーダーProfessor Charles Xavier（Professor X）と親友Magnetoは、このSentinelが開発されたきっかけとなった事件を未然に

防ぐ計画を立て、Kitty Prydeの持つ能力、人の精神を過去の本人自身に送る、を使ってWolverineを1973年の本人に憑依させる。Wolverineはミュータントたちの学校へゆき若き日のProfessor Xに逢う。彼らはPentagonの地下に幽閉されていたMagnetoを救出し、Sentinelを開発したBolivar Trask博士のところへ向かう。

磁場を操り金属類を動かすことができるMagnetoが、数台のテレビカメラを動かして自分を撮影させ、迫害を恐れ隠れて暮らしているミュータントたちに語り掛ける。

“And to my mutant brothers and sisters”「ミュータントの兄弟姉妹たちよ」
“No more hiding. No more suffering.”「もう隠れなくていい。もはや苦しみは終わりだ」
“You have lived in the shadows...in shame and fear for too long.”
「君たちは恥辱と恐怖のなかで長いこと生きてきた」
“Come out.”「姿を現し」“Join me.”「私と組むのだ」
“Fight together in a brotherhood of our kind.”「同志として力を合わせ戦おう」“A new tomorrow that starts today.”「新しい未来が今日始まる」

この“Come out”は、「普通」の人類にはない能力を持っていることで恐れられ、奇異な目で見られることを避けるため隠れて暮らしていたミュータントたちを、同じように隠れていたgayの人々になぞらえた呼びかけと考えられる。1973年はHarvey Milkがgayであることを公に“come out”してSan Francisco市政委員の選挙に立候補した最初の年である。

そして、戦う自信を失っている若き日のProfessor X Charlesが、未来の自分であるProfessor Xと話すとき、Professor Xの言葉に“Hope”が現れる。
“It’s not their pain you’re afraid of, it’s yours, Charles.”「チャールズ、君が恐れているのは、彼らのではなく自分の苦しみだ」
“And as frightening as it may be, that pain will make you stronger.”「恐ろしいかもしれないが、苦しみは君を強くする」
“If you allow yourself to feel it, embrace it, it will make you more powerful than you ever imagined.”「君がその苦しみを感じてそれを受け入れれば、

自分でも想像できないほど強くなれる」
“It's the greatest gift we have, to bear their pain without breaking, and it's born from the most human power: Hope.”「それこそが私たちが持つ最大の能力なのだ。苦しみに負けず耐えるという能力。その源は人間に備わった最高の力、希望だ」
“Please. Charles, we need you to hope again.”「頼むチャールズ、いま一度希望をもってくれ」

この映画で語られる“Come out”と“Hope”は、自らgayであることを公表して堂々と生きることを皆に呼び掛けたHarvey Milkへのオマージュであろうと考えられる。

４．*Spanglish*（『スパングリッシュ 太陽の国から来たママのこと』2004年）のClasky家の磨かれたガラス戸

現代のアメリカを舞台にした映画やテレビドラマの中で、白人以外の少数民族、特に、比較的最近にアメリカへ来た移民や難民の人々が登場するとき、彼らの境遇・職業・生活などに、ある種の特徴的な、ステレオタイプとも言うべき描かれ方が見られる。例えば、移民や難民の中には、アメリカに不法入国している人々がいる。彼らの多くは、国や出身地・言語・宗教などの同じ者たちが集まった地域で暮らし、低賃金で労働時間の長い仕事に従事している。麻薬の売買や売春などで生計を立て、中には、犯罪に関係している者もいる。ムスリム（イスラム教徒）のなかにはテロを企てている者や、協力者もいるかもしれない、などである。

アメリカの都市部で洗濯屋や食料品店を営んでいるのは、かつてはアジア系の移民が多かった。しかし、最近では、店の経営者や従業員にHispanicの人々が多くみられる。また、裕福な家庭に雇われているHispanicの人々の職種は、男性では、運転手、庭師、プールの管理人などであり、女性の場合は、料理人・メイド・子守などをしていることが多い。

タイトルになっているSpanglishとは、EnglishとSpanishの合成語で、「スペイン語と英語との混ざった言語」、特に、アメリカに住むHispanic、キュー

バ・メキシコ・プエルトリコなどの出身者の話す、スペイン語訛り、あるいは、単語や文法にスペイン語が現れる英語のことである。

映画*Spanglish*は、メキシコからアメリカへ不法に入国し、Los Angelesで暮らす母娘の物語である。娘のCristina Morenoが、Princeton Universityへの入学書類の一部として提出したエッセイ“The Most Influential Person in My Life”（「私の人生で最も影響を与えた人物」）で、母親Flor Morenoについて語るナレーションでストーリーが進められる。引用符内の英文は、そのナレーションからの引用である。

この物語は「神話英雄伝説の法則」[5]にほぼ沿って進んでゆく。ここで「神話英雄伝説の法則」について簡単に解説する。

旅立ち・物語のはじまりでは、その舞台となる国や町、時代などが紹介され、主人公の生い立ちとふだんの生活が語られる。そして、旅立ちの場面では、これまでの生活を離れて、新しい人生を経験し新しい出逢いをする。これまでの生活空間から離れるところには、川・湖・海などの水辺があり、それらを橋や船などで越えて新しい世界へ踏み出すことが多い。直接、あるいは間接的に触れるこの水は、ある種の「清めの水」と考えられる。また、旅立ちの際には、深い森に分け入る狭い道や、「トンネル状の通路」を通ることもある。そして、これらの橋やトンネルの向こう側は、異界と呼ばれるような不思議な世界であることも多い。

試練・冒険の場面では、主人公たちは荒野・砂漠・ジャングル・雪山・嵐の海、あるいは不思議な国などに向かう。都会であっても同様の景観をイメージさせるような場所である。気候条件も、灼熱・厳寒・暴風雨・大洪水など、大変厳しいものである。試練の中には敵対する人物や猛獣・妖怪などとの遭遇や戦いも含まれる。同時に、新しい出逢いがあり、友情や援助と思わぬチャンスにも恵まれる。偶然のように思われるが、実は必然的な出逢いや運命の導きによる力を借りて、長く続いた戦いを終わらせたり、人々を幸せにする偉大な事業などを達成したりする。主人公たちはその世界で生きることにより、成長や変身を成し遂げる。

帰還の場面では、宝物を手に入れて故郷や家族のもとに帰って来る。宝物

は高価な品物であるより、精神や肉体の強さ、愛する人や、信頼できる友人、仲間たちなどであることが多い。元の世界に戻る時には、再び水辺に来て海・川・橋を渡り、トンネルを通る。元の世界に戻った主人公たちは以前と変わらぬ人物ではなく、さまざまな成長をしている。

また、『旧約聖書』「出エジプト記」の、古代エジプトで奴隷であったユダヤ人の子として生まれ、男の子であるがゆえに王の命令で殺されるところであったモーゼが、ナイル川に流されてエジプトの王女に拾われ、その養子になるという運命に水が関わっている。やがてユダヤ人たちを率いて、現在のシナイ半島を通ってイスラエルへ旅をする時、行く手を遮っていた海が二つに裂けて海底が現れ、追っ手から逃れることができた「葦の海の奇跡」が、その後の文学作品や映画の中の、主人公の人生の転機に現れる水や壁、それを越える橋やトンネル状の狭い通路の元になっていると考えられる。

*Spanglish*の冒頭、男がひとり坂道を下って来る。坂道の途中にある家族と過ごした家の階段を下り、坂道を下ることによって、彼の生活が、実はこれまでより厳しいものになり、不幸な結末になることさえも暗示しているように思われる。彼の姿が現れるのはこの場面だけである。

母Florは棚に立ててあった夫の写真を引き出しにしまう。Florは娘に涙を見せないように、家の外へ出て涙を流す。しかし、その泣き声は幼いCristinaの耳に届いており、彼女は母親を助けてゆこうと決心する。娘にラテン的要素が身に着くまでメキシコで暮らしたFlorは、より良い暮らしを求めて娘Cristinaを連れてアメリカへと旅立つ。その時、FlorはCristinaに、泣きたいときは“one tear, just one.”（「涙はただ一粒だけ」）と言って涙を流すことを許した。この母と娘の流した涙が人生をリセットする「清めの水」となり、ふたりはこれまでの人生を洗い流して旅に出る。

Cristinaが入学志願エッセイの中で、“economy class”と表現したように、母娘は、メキシコ・アメリカ国境の近くで、不法越境を助けるcoyoteと呼ばれる業者の車から降りて荒野の草むらの中に入ってゆく。アメリカに入国してから、自分たちのルーツと文化を守るためにHispanicの人口が州民の34%であるTexasを通り過ぎ、48%ものHispanicが暮らしているLos Angelesへと

向かう。ふたりは夜行バスに乗っている。車窓に見える州境に立つ石碑に向かって幼いCristinaは“Adios, Texas!”とつぶやく。この夜の旅が「トンネル状の通路」であると考えられる。

母娘はLos Angeles市内でバスを降りる。付近の歩道上に並んだ喫茶店のテーブルで、白人のアメリカ人たちが早口の英語で話している。そこを通り過ぎるとき、母Florには不安と不機嫌な表情が見られる。しかし、ある角を曲がってHispanicの人々が暮らしている通りに入ると、Florは笑顔を取り戻し、足取りも軽やかになる。Cristinaの入学志願エッセイでは、“an alien environment”「まるで知らない国のような環境」から、“we were right back home.”「まさに故郷に戻ったようだった」と表現されている。白人のアメリカ人たちのいる通りも、スペイン語の話し声や看板があふれたこの通りも「トンネル状の通路」であり、そこを通り抜けて、すでに移り住んでいた従妹のMonicaと再会することにより、FlorとCristinaはメキシコ人としてのアイデンティティを取り戻す。Cristinaとの生活のために、Florは昼夜別々の仕事をして収入を得ていたが、成長してゆく娘との時間を大切にし、より多くの収入が得られるように、Los Angelesの裕福な家庭で家政婦・子守として働き始める。

新しい仕事を求めてClasky家に面接にゆくときのシーンで、Florと案内してくれる従妹のMonicaは、バスを降りて並木道を歩いてくる。道の両側に植えられた木の枝が長く伸び、生い茂った葉が道路に影を落としている。これが旅立ちの際に通る「トンネル状の通路」となっている。Los Angelesへ来てからの６年間、FlorとCristinaはbarrioと呼ばれるHispanicのコミュニティの中だけで暮らしてきた。Cristinaのエッセイの言葉では“finally entering a foreign land”「いよいよ見知らぬ異国に入ることになった」のである。この並木道が上り坂になっていることも、これから向かうClasky家が高級住宅街に住む裕福な家庭であることを暗示している。

この並木道は映画の中で何度か登場する。そこを通るたびに、FlorとCristina、そしてClasky家の家族にも人生の変化が起きる。妻Deborahの前では自分の意見をハッキリと言うことができない夫のJohn Claskyは、この

並木道を車で走っているときに、妻に対する不満を大声で吐き出したり涙を流したりしている。

Clasky家に到着し、表門のところにあるインターホンに来意を告げると、門は自動で開いた。「入っていらっしゃい。玄関のドアは開いているから。奥の庭にいるわ」と言われて敷地内に入る。玄関からいくつかの部屋を通りぬけてゆくと、家族は庭のプールの前のテーブルにいた。この家の中も「トンネル状の通路」であり、プールの水は「清めの水」と考えられる。ところが、そのトンネルを通り抜けるところに思わぬ障害が待っていた。

FlorやMonicaにとって、“working for Anglos now poses no problems.”「白人の家庭で働くことには、もはや問題はなかった」はずであった。そして、“White America beckoned.”「白人のアメリカが手招きした」ので、“She stepped across the cultural divide.”「彼女は文化の境界線を越えるべく一歩を踏み出した」のである。

ところが、前を歩いてゆくMonicaが、きれいに磨かれていたガラス戸に顔をぶつけて鼻血を出す。Clasky夫人Deborahと娘のBerniceが駆け寄って来る。しかし、Deborahは「ガラスにぶつからないように窓飾りを探しているが、よいデザインのものがなくて・・・」と言い訳をして、謝ろうとはしない。そして、鼻を冷やすための氷嚢が見つからず、冷凍のEdamameの袋を持ってくる。台所のマグカップの中に入れてある、おそらく配達業者などに支払うためのお金の中から紙幣を抜き出し、そしてすぐに何枚かを戻して20ドル札を一枚Monicaに渡した。仕事を求めて来ているHispanicにはこれで十分だと値踏みをしたのであろう。

このガラス戸は、裕福な白人のアメリカ人とHispanicなどの少数民族の人々との間には、目には見えないけれど強固な壁が存在し、それを乗り越えること、通り抜けることが困難であることを象徴的に表現している。Florより長くアメリカで暮らしているMonicaでさえも、その壁を通り抜けることができずぶつかってしまった。白人のアメリカ人たちは、移民や難民、少数民族の人々に対して差別意識などを持っていないと表明していても、自分たちの世界にはよそ者を入れたくないのであろう。

５．*Legally Blonde*（『キューティー・ブロンド』2001年）に見られるblondeの髪の女性に対する偏見

Legally Blonde[6]は、ラヴコメディーに分類される作品である。物語の冒頭、ヒロインのElle Woodsがデートの前におめかししている姿が映し出される。学生寮の部屋にある様々な小道具によって、ElleはCULA California University at Los Angeles（UCLAのもじり）の学生であり、President of Sorority 女子学生社交クラブの会長を務め、Homecoming Queenに選ばれていたことが紹介される。

Elleは大学卒業を前にして、長らく付き合ってきたWarner Huntington III.[7]とのデートに出かける。デートの場所は“I love that restaurant! I heard Madonna went into labor there”「あのレストランは大好き。あそこでマドンナが産気づいたんでしょう」と語るように、「おめでた」のイメージのあるレストランである。そこでWarnerからプロポーズされると期待していた。

乾杯の後、Warnerは「大学卒業後はHarvard Law Schoolへ進学し、将来は政界への出馬を考えている。これからはチンタラしていられない」と語った。そして、Warnerの次の言葉は「別れよう」だった。

「あなたからプロポーズされると思っていた」と言うElleに、

“Proposing? Elle, if I'm going to be a senator…I need to marry a Jackie, not a Marilyn.”

「プロポーズだなんて？エル、もしも僕が上院議員になるなら、結婚するのはジャッキーのような人であって、マリリンみたいな人じゃないよ」

“Jackie”はJohn F Kennedy大統領夫人でbrunette黒っぽい色の髪をしたJacquelineの愛称である。Jacqueline夫人の助けによってKennedyは大統領にまで上り詰めた。そして“Marilyn”とはblondeの髪のMarilyn Monroeであり、Kennedy大統領の愛人であったと言われている。

一般に、blondeの髪の女性は見ためがきれいでも中身がない、バカだと決めつけられることが多い。Warnerにとって、Elleは大学時代の「遊びの関

係」の相手としては良かったが、結婚相手としては考えていなかった。その後、Warnerは高校時代に付き合っていたVivian Kensingtonとよりを戻している。Vivianの髪の色はbrunette黒っぽい色である。映画やテレビドラマで、blondeとbrunetteの二人の女性が登場するとき、このふたりがライバルだったり、敵同士だったりすることが多い。

Elleがドレスを買いに行ったお店の場面では、黒髪の店主が前年に入荷して売れ残っていた服から“Special Sale”の「赤札」を外しながら若い店員にささやく。

“There's nothing I love more than a dumb blonde with daddy's plastic”「父親のカードを持って買い物に来るバカなブロンド娘が大好き」
そしてElleには“Did you see this one? We just got in yesterday.”「これご覧になりまして。昨日入ったばかりですのよ」と言って売りつけようとする。しかし、大学でファッションを専攻しているElleはそのドレスの素材と縫製について店主に尋ね、相手が答えに窮しているときに“I saw it in the June *Vogue* a year ago. So if you're trying to sell it for full price, you picked the wrong girl.”「『ヴォーグ』の去年6月号で見たわ。それを値引きもせずに売りつけるつもり？おあいにく様」と言って店主を沈黙させた。Elleは、blondeの髪の女は“dumb”「バカだ」というbrunette黒髪の店主の抱いている偏見を打ち砕いた。

６．*The Good Doctor*（『グッド・ドクター　名医の条件』）
Season 2 第２話“Middle Ground”「嘘の練習」2018年

California州San JoseのSt. Bonaventure Hospital聖ボナベントゥーラ病院に勤める外科のresident研修医Dr. Shaun Murphyは、autism自閉症のため他者とのコミュニケーションが困難である。そばで大きな音がしたり、複数のことを同時に処理することを求められたりするとパニックを起こす。また彼はSavant syndromeサヴァン症候群であり、天才的な記憶力による膨大な医学の知識と空間認知力がある。

この物語は、2013年に韓国で創られたドラマの舞台をアメリカに移してリ

メイクされ、2017年から全米ＡＢＣネットワークで放送されたものである。

シーズン２では、Shaunを研修医として病院に招いたDr. Aaron Glassman院長が脳腫瘍で余命わずかと判明し、外科部長のDr. Marcus Andrewsが院長に就任している。Dr. Andrewsと病院の理事会は、自閉症であるShaunは正式な医師の資格を持っていても、チームで手術をする外科医としては不適格であり一緒に仕事ができない、と採用に反対していた。

ここでは、そのシーズン２の第２話を取り上げる。日本語の題名は「嘘の練習」となっているが、オリジナルの題名“Middle Ground”とは、「折衷案」「妥協点」の意味である。

ある日、Shaunは病院の清掃員Paulを離れたところから観察していた。10分間で17回もゲップしたことや、半年前とは顔色が違って黄疸がみられることなど、問診も触診もしていなくてもPaulが膵臓がんであることがShaunには分かった。上司のDr. Melendezに相談すると、「不安にさせないように、本人には詳しいことは明かさずに検査をしろ」と指示される。Dr. Melendezは、Shaunの同僚の「Clairと一緒にPaulと話すように」とも言った。自閉症で周りの人々とうまく話すことができないShaunは、「患者の前で真実をすべて話さず、上手に嘘をつく」練習中だった。ClairはPaulのゲップが多いことを理由に「胃酸の逆流」を診断したいと説明するがPaulは納得しない。Shaunも考えた嘘をつこうとするが、結局「あなたはすい臓がんだ」と言ってしまう。Paulの家族が呼ばれ、余命は１年、手術をすれば長く生きられる。しかし、難しい手術であり、成功しても合併症の危険性が残る。と説明された。

手術をして長生きしてほしいと望む「家族のために」、Paulは手術をすることを受け入れる。手術は成功するが、合併症を起こしてPaulは死ぬ。「家族のために生きてきた人だから」、「手術を勧めたから」とお互いを責める家族に対して、「それは違います。Paulは手術を望んでいました」とShaunは言った。その一言で遺された家族は和解し抱き合って涙を流した。実は、その言葉は嘘だったが、「いつか真実が誰も救えない状況が訪れたら、その時がウソの出番だ」とShaunに教えてくれたのはPaulだった。

*The Good Doctor*の各エピソードでは、複数の病人の手術が行われ、複数

の「事件」が起こる。このSeason 2, Episode 2では、ER Emergency Room緊急治療室にひとりで来た少女の希望を聴いてベテランの女性外科医Dr. Audrey Limが手術をしてトラブルが起きる。

少女Asha（のちに本名Maraと判明する）は膣の形成手術を希望した。診断したDr. Limは一瞬沈黙し、「なにか事故で？」と尋ね、次に「お父さんの仕業？」と言って性的虐待を疑った。Ashaは「２歳の時に体を縛られて割礼を受けたの」と言った。涙を流しながらAshaが口にした言葉は“I was circumcised.”である。日本語字幕では「割礼」となっているが、これはアフリカの部族やアジアの一部の因習的社会で儀式としておこなわれているclitoridectomy女子の陰核を切除する手術である。その「被害者」は全世界で約2億人いると言われている。WHO World Health Organization世界保健機関は、この行為は心身に危害を加えるだけで、健康には何ら良いことはなく、女性の人権を侵害している、と警告している。

Dr. Limがチームに相談すると、研修医のひとりで元警官のDr. Alex ParkはAshaが持ってきたIDカードを一目見て、「このカードは偽造されたもの。18歳だと言っているが、もっと若いだろう」「ひとりでここへ来たことも、親からの虐待や監禁を恐れているからだ。警察に通報して親を逮捕すべきだ」と提案する。しかし、Dr. Limは「もし私がIDを本物と信じれば本人以外の同意は無用・・・ルール通りじゃ彼女を救えない」と言って両親にわからないように日帰りの手術をすると言った。

手術後Ashaはひどい痛みを訴えた。若い女性研修医のDr. Morgan Reznickは「いい兆候かも。まだ患部が生きている証拠です。神経終末が生きていれば感覚のあるクリトリスを再建できる」そして「すべての女性には両親抜きで性を語る権利がある」とも言った。

その日のうちの退院が不可能になったので、Ashaの両親を呼ばなければならなかった。彼女は16歳、本名はMaraであった。Maraの伯母と祖母が、両親が旅行中に子守をしていた時に切ったことが判明した。母親は「自分も自分の母も、その母も切られた。大事な通過儀礼よ。やめれば仲間内で結婚できない。」と言う。

娘の痛みを取り除く手術を迫る両親に対してDr. Limは「痛み以外の感覚にも目を向けてあげて。喜びだって大切よ」と反論する。“We have a chance to give her a healthy and meaningful sex life. That is what she came here looking for”「彼女は健康で充実したセックスライフを送れる。そのために彼女はここに来たの」と両親と児童福祉局職員のEllen Vahtraに訴えた。

「家族や伝統を無視できない」と言うMaraに、Dr. Lim は「頬の内側の組織を取ってクリトリスに移植させて・・・あなたにも愛を感じてほしい」と説得した。再手術が始まった時、手術の書類には書かれていない頬の組織を準備するようにDr. Limは指示した。ふたりの研修医たちが驚いていると、「口頭で本人が同意済みよ。すぐ眠らせた」と言った。手術後目覚めたMaraは頬の内側の違和感に気づいた。彼女は涙をためた目でDr. Limに“Thank you.”とだけ言った。Dr. Limも泣きそうになりながら、Maraに“You gonna be great.”「いい人生をね」と言った。

７．おわりに

以上の６作品を概観しただけでも、その中にアメリカ合衆国の様々な人権問題を記録した場面があることが理解できる。登場人物のひとことのせりふや、表情のわずかな変化にも差別をする側の態度や、差別を受けた側の感情が表現されていたりしている。そして、その場面は作品のストーリー全体と深く関わっており、時には作品の主題を示したり、物語の展開を観客に予告する重要な伏線であったりもした。

外国映画を観ることは、その国の人々の生活と彼らを取り巻くさまざまな人権問題を考えるきっかけになる。多民族・多宗教・多文化のアメリカ合衆国は全世界の縮図であり、日本では一般には知られていないような人権問題にも出会うことができる。

良い映画は、何度も観賞するごとに新しい発見がある。映画館やＤＶＤなどで観ることができるおよそ２時間の映画は、実際にはその何倍もの時間と労力をかけて制作されている。そして撮影後の編集作業で特に重要なシーン

が選ばれ、一般に公開される作品として完成に至る。従って、わずか数秒しか眼に留まらないシーンやひとことの台詞にも重要な意味がある。読書における多読と精読のように、多くの映画を観る多観と、ひとつの作品を何度も丁寧に観る精観をして、重要なシーンに込められた映画制作者の思いを汲み取るようにしたい。

註

1　『日本語題名』の後に書かれた年は、その作品がアメリカ合衆国内で初めて公開された年を示す。

2　「せりふ」の日本語訳は、それぞれの映画の日本語字幕を引用、あるいは参考にして理解しやすいものにした。

3　実際は暗殺される１年前、1977年の11月18日に録音されている。

4　毎年６月の最終土・日曜日をSan Francisco Prideとして祝う。

5　岡田広一（2009）「映画における水・橋・壁・トンネルの役割――日英米の映画に見られる神話・英雄伝説の法則の有効性――」吉村　耕治（編）『現代の東西文化交流の行方 Ⅱ』（pp. 273-288）. 大阪教育図書.

6　題名*Legally Blonde*は“legally blind”（法律上の失明）のもじりである。

7　この物語はフィクションでありWarner Huntington IIIは架空の人物である。彼の苗字Huntingtonは、アメリカでは政治家や芸術家など著名人が多い。なかでも、最初の大陸横断鉄道の建設・経営にかかわったCollis Potter Huntington（1821年10月22日–1900年８月13日）が有名である。
そして、Warnerの兄Putnam Bowes Huntington IIIの婚約者Layne Walker Vanderbiltの苗字Vanderbiltは、New York Central Railroadの社長Cornelius Vanderbilt（1794年５月27日–1877年１月４日）を思い起こさせる。Warnerが家柄の良い大富豪の息子であることを示すために、アメリカの歴史に登場する二人の鉄道王にちなんだ苗字を使ったのではないかと思われる。

参考DVD（小論で紹介した順）

Robert Epstein（監督）*The Times of Harvey Milk*『ハーヴェイ・ミルク』1984年、日本語字幕：梅澤葉子、Black Sand Productions

Gus Green van Sant Jr.（監督）*Milk*『ミルク』2008年、日本語字幕：松浦美奈、Focus Features

Bryan Jay Singer（監督）*X-Men: Days of Future Past*『X-Men フューチャー＆パスト』2014年、日本語字幕：松崎広幸、Marvel Entertainment

James Lawrence Brooks（監督）*Spanglish*『スパングリッシュ　太陽の国から来たママのこと』2004年、日本語字幕：小寺陽子、Gracie Films

Robert Luketic（監督）*Legally Blonde*『キューティー・ブロンド』2004年、日本語字幕：戸田奈津子、Metro-Goldwyn-Mayer

David Shore（企画・製作総指揮）*The Good Doctor*『グッド・ドクター　名医の条件』Season 2 第２話 “Middle Ground”「嘘の練習」2018年、日本語字幕：高内朝子、Sony Pictures Television Inc. & ABC Studios